

古代肥後の地方豪族と鞠智城（要旨）

溝口優樹（中京大学）

本報告は、主に文字資料の分析により、肥後国、特に鞠智城が築かれた菊池地域における豪族の動向を探り、鞠智城が築かれた背景などを考えるものです。

肥後国はかつて、肥前国とあわせて火国という一つの国をなしていました。「国造本紀」によると、火国のあたりには竺志米多・火・松津・末羅・阿蘇・葦分・天草・葛津立の各国造があり、そのうち火・阿蘇・葦北・天草の各国造が、後の肥後国の国造にあたります。火国造を出した火君氏は、火国各地の豪族の集合体であると考えられます。なお、火国の諸国造と菊池地域の関係は明確にはみえてきません。

次に肥後国の氏族分布をみると、「君」のカバネをもつ氏族が多く確認できます。それは、国造など「君」のカバネをもつ地域の有力豪族との関係にもとづくものとみられますが、肥後北部の豪族については、筑紫君氏との関係を視野に入れる必要があります。

鞠智城が所在する菊池郡には、久々智、大伴部、秦人の3氏族を復原することができます。『新撰姓氏録』によると、久々智氏は大彦命の後裔という系譜をもっており、筑紫国造＝筑紫君氏と同祖関係にあたります。菊池郡子養郷の人として確認できる大伴部氏についても、大彦命後裔氏族であり、膳臣氏に連なる大伴部であったと考えられます。

北部九州における大彦命後裔氏族の中心は、筑紫国造＝筑紫君氏でした。菊池地域の久々智氏や大伴部氏が大彦命を「祖」とする系譜を有しているということは、これらの氏族が筑紫君氏の勢力下にあったことを示します。

鞠智城跡の貯水池跡から出土した木簡からは、菊池郡に渡来系氏族である秦人氏がいたことがわかります。秦人とは、もともと諸豪族の配下にあった人民が王権直属の民として割り取られ、秦氏のもとに編成された人々であったといわれています。菊池地域の秦人に連なる渡来人を招来した豪族としては、筑紫君氏がもっともふさわしいと考えられます。

最後に、以上の考察をふまえて鞠智城の成立と地方豪族の関係を考えます。まず、菊池地域は国造級の豪族からみれば「空白地帯」でしたが、久々智氏や大伴部氏など、もともと筑紫国造の配下にあった集団の勢力圏でした。白村江の敗戦後、特段こうした勢力への牽制が必要になったとは想定しがたいと思われます。一方、倭王権―筑紫大宰が鞠智城の築造をおこなう際、国造を介さず、こうした現地勢力に協力させることにより、倭王権―筑紫大宰による地域社会の掌握が結果的に促進された可能性があります。また、王権が直接的に掌握する秦人の存在により、鞠智城の築造にかかる労働力編成が比較的容易になったのではないのでしょうか。さらに秦人は、築城にあたって技術的な面で役割を果たした可能性もあります。